君の側で輝いて・・・

精神の酔いカミーユ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある１６歳の少年デルタはとても気候の良いタハナ村にすんでいる村唯一のハンターで新米。
しかし途中で会う人との出会い、恋愛、別れなどを経験し、優れたハンターへと大きく成長していく物語です。

注意！僕中一ですので多少脱字があるかもです。ご了承下さい。

目次

始まりの歌風 ―――― 1
デルタ、いきなり絶対絶命!??〜 ―――― 3
紅き鎧をまとう謎の少女 ―――― 6

始まりの歌風

ここはタハナ村。
とても良い気候においしい食物ハンターもよく寄っていく村だ。
前はリオレウスの襲撃を受けた。デルタの両親が止めたが。
二人とも亡くなってしまった。
デルタはその仇を討つ為にハンターになった。
始まりを告げるように風が吹き歌を歌っている用だった。
「リリィ姉さん何か依頼ないかな?」
リリィ姉さんとは幼馴染で4つ年上だ。
「ランポス4頭討伐ならあるけど。」
そう言い依頼紙を見せる。
「うん。じゃあこれをやるよ!」
依頼紙にサインし、早速準備に取り掛かる。
ハンター一式にハンターカリンガ。そして必要なアイテムを持ち、竜車に乗って出発した。

４５分後・・・
ヤヨイ密林に着いた。
デルタはグ～っと伸びて深呼吸をして、アイテムを取りエリア５に行った。
「見つけた！」
ランポスが２匹程いる。
「行くぞぉぉ！」
右に武器を持ち、倒しに行った。
それに気づいたのかランポスが口をあけながら遅い掛かってきた。
「わわっ！危なっ!!」
それを回避し、足を一歩進ませ、腕がしなるように片手剣を振るった。
ギャヴギャア!!
デルタは連続攻撃を仕掛ける。
もう倒せるってところでもう一匹がデルタを押し倒した。
「ガフゥッッ

デルタ、いきなり絶対絶命!??〜

「うぐぅ・・!」
ランポスに飛びかかられ、倒れたデルタ。
その上にはランポス。
ギャオォォ!
鈍い音と同時にハンターメイルに穴があいた。
「あうううぅぅ・・!」
「クソ野郎!どけよ!!」
ランポスがかみついたその瞬間　デルタはランポスの首めがけてハンターカリンガを振った。
ギャャャャャャ!!
ランポスが悲鳴をあげる。
デルタは手と腕に思い切り力を込めた。
「これでぇ!　どうだぁ!!」
ズジャシブビュゥゥ!という音と同時にランポスの生首が顔に落ちた。

なんとも言えない血の臭いがする。
デルタは腹部を押さえながら、
「もう、、一匹。」
と言った。
その時！ランポスが急に逃げていった。
「？何だ？」
不思議に思って振り返るとーーーー
「な!?」
そこにはずっしりとした体格に緑色の体。
そして爪のある翼をつけたモンスター。
「そ、そんな！、、あいつは!!陸の女王リオレイア！」
その時、おびえるデルタをあざ笑うかのように、陸の女王は吠えた。
「ボ、、僕はどうしたら・・いいんだ・・・」
腰がぬけてしまってるデルタ。
その時、奴は突っ込んできた。
「ーーーーーっ!!?」
デルタは頭の中が真っ白に染まった。

続く

紅き鎧をまとう謎の少女

突っ込んでくるリオレイアを前にデルタはもう覚悟を決めていた。
「(あぁ　　終わったな)」
その時だった。
ズガン、ズガン、ズガン、ズガン
通常弾がレイアめがけて発射された。
グギャア!?オォヴォォ!!
「な、何だ!?」
狙いは正確であり、レイアの足に当たっていた。
「こっちです!」
「エ!?ええ?ちょちょ!?」
デルタは、訳の分からぬまま少女に連れ去られていった・・・
「こ、、こわ、、かっ・・た、、(涙)」
「大丈夫ですか?」
少女は心配そうにデルタの顔を覗く。

「う、、うん・・・ありがとう助かったヨ。」
まだ小刻みに震える体をよそに、デルタは言った。
「いててて・・・」
デルタは怪我をした腹部を押さえながら時々せき込んで血を吐いている。
「私が治療してあげましょう。」
少女はポーチから様々なものを取り出した。
「胴と腰の装備をとって下さい。」
そう言い、装備をとったデルタ。
負傷部分を見せ、少女はこう言った。
「傷は浅めですね。」
そう言い、消毒をし、布で軽く叩き薬草を練り込ませた布を腹部に巻いた。
「ありがとう。ところで君の装備は?」
「レウス一式です。もう最高ですよ。」

続く